

第 32 期放射線安全取扱部会 部会長、副部会長ご挨拶

現場力を高めましょう

部会長 松田 尚樹



コロナ禍が収まらないままに過ぎた第 31 期に引き続き、部会長を務めさせていただくことになりました。まさかこのような状況が 2 年も続くとは、期初には誰も想像していませんでした。各事業所では、教育訓練

をどうするか、健康診断はどうするか、等の放射線業務従事者登録上の困難にまず直面されたことでしょう。施設の利用停止や施設スタッフの出勤停止に追い込まれたところもあったと思います。大学等では施設を利用した対面実習も軒並み中止になったのではないのでしょうか。本来、そのような問題と対策を共有すべき支部委員会や支部研修会の対面での開催も制限されました。極め付けは年次大会で、これは本部会に限ったことではありませんが、2 年連続で Web 上での開催となりました。このように、部会がその機能を十分に果たし得なかったことに対して忸怩たる思いです。

一方、これを機に、少しハードルの高かった教育訓練の e-ラーニング化や Web 会議システムが急速に身の回りに普及しました。部会主催の教育訓練もこの 2 年は e-ラーニングに一本化され、受講者数は各支部が対面で実施していた頃よりも増加しています。その流れで、医療従事者向けの新たな e-ラーニングの公開も始まりました。また Web 会議システムによって、放射性同位元素等規制法による審査ガイド等の整備に関する意見聴取と、放射線障害予防規程に定めるべき事項に関するガイド（測定の信頼性確保関係）の改正案に対する科学的・技術的意見の募集もペースを落とさず粛々と進められてきました。これらに対して法令検討専門委員会が極めて的確に対応してきました。

第 31 期、今後やるべき課題として、①知識、技術、経験の伝承—知識マネジメントの放射線管理への導入、②若手主任者の実務能力スキルアップ、③緊急時の対応能力の向上、の 3 つを提案させていただきました。いずれも企画専門委員会と広報専門委員会が企画、発信に具体的に落とし込み、お手元に届いたかと思います。第 32 期もこれを継続していきますが、少し視点を変えてみます。それは、現場力、という発想です。放射線に関連する学協会は数多く、放射線の管理や防護をその守備範囲に含めているものも少なくありません。その中で職能団体的な色合いの強い本部会の強みは、なんと言っても現場を持っている、現場の管理に関わる仕事をしなければならない、ということです。もちろん ICRP の勧告や動向や放射線防護理論も大事ですが、実務者の実務者たるゆえんは、その現場力にあるでしょう。上に挙げた 3 つは、いずれもこの現場力に直結するものです。そしてこの現場力は、実は事業所内、放射線管理区域内でのみ発揮されるものではありません。例えば放射線の教育は事業所を飛び出して、小中学校から市民までを対象として組み直してみると、大変おもしろい科学教育になります。また、原発事故、更に直近のウクライナ侵攻による原子力施設攻撃のような想定可能な原子力・放射線事故後における高品質の放射線測定と、正しくそれを伝えることは、場面が異なるだけで、スキルとしては普段、管理区域内で行っている業務ではないのでしょうか。つまり、現場力は社会とつながっているわけですね。

私事になりますが、今年の 3 月に 25 年間代表主任者を務めた事業所を退職しました。それなりに重圧のあった 25 年でしたが、良い仕事仲間に出会って、楽しく仕事を続けることができました。そこで主任者としての仕事を振り返って感じたのが、現場力、ということでした。これから 2 年間、皆さんの現場力を高める後押しをしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(長崎大学放射線総合センター)

副部会長（企画専門委員長）就任にあたって

副部会長 渡部 浩司



この度、副部会長（企画専門委員長）に就任しました東北大学の渡部と申します。放射線安全取扱部会において、これまで東北支部の支部長として長年務めて参りましたが、今度は企画専門委員長として活動して参ります。

東北支部長時代、2018年に放射線安全取扱部会年次大会を仙台で開催させていただきましたが、この年次大会を通して、本部会の結束力の高さを強く感じることができました。コロナ禍そしてロシアのウクライナ侵攻と、まったく予想できなかった出来事が世界で起こっています。このような不安な社会において人の繋がり的重要性が改めて実感されます。放射線安全取扱部会は様々な職種・背景を持つ主任者が集える貴重なコミュニティです。今こそ、主任者間の結束力を更に高めていかなければならないと考えております。そのために、本部会の明るい未来を描ける企画を考えていきたいと思ひます。一方、主任者を取り巻く環境は、放射線利用の減少、施設の老朽化、人手不足等問題が山積しており、年々厳しさを増しているのは確かです。このような問題を議論し、解決策を提案していくのも企画専門委員会の役割であり、皆様の期待に応えられるよう精進していきたいと思ひます。

私自身、企画専門委員としての経験はまだまだ未熟です。ぜひ部会の皆様から企画の提案、ご意見をいただければ幸いです。部会長と力を合わせて、本部会を盛り上げていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

（東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター）

副部会長（広報専門委員長）就任にあたって

副部会長 柴田 理尋



副部会長2期目を務めることになりました、名大アイソトープ総合センターの柴田でございます。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。多くの学協会での会議はオンライン開催が普通となりました。オンラインでも会議

はできて、仕事も進むということが判った一方で、やはり、対面の会議には、世間話を含めてプラスアルファ以上の重要な価値があることも明らかになりました。前期は、オンラインで委員の皆さんから貴重な意見をいただき、「想定外を想定内に」という災害対応のシリーズ化と、動物実験施設の紹介等を進めてきました。この記事を書いているうちにも、今まで想定外だったことが現実化し、思わぬ自然災害や紛争までが身近になってきた感があります。委員会では、様々な出来事に対し、会員の皆さんの関心に添えるように、紙面の充実に向けて話し合いをしております。測定器の校正に関する法令改正は、管理担当者にとって合理的な対応策を考えることが求められます。また、感染症の状況が判ってきたことから、規制当局による立入検査もこれからは計画に沿って進められていくことでしょう。残念ながら、今のような状態がしばらく続きそうな気配ですが、会議や年次大会も対面とオンラインを併せて行うことで、遠方のかたにも気軽に参加いただける新しい可能性も出てきました。部会及び広報としても他の学協会とも連携して情報共有し、発信していきたいと考えております。皆様の一層のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

（名古屋大学アイソトープ総合センター）